『人流・観光学概論』

はじめに

本書は我が国で初めて設立された専門職大学国際観光学部の講義テキストとして記述している。同時に、他大学の学生にも興味を持ってもらえるよう、参考文献や世界遺産を活用した話題にも配慮しているが、学生に限らず、研究者にも読んでもらいたいと思い、問題意識の記述もしてある。

明治期、文学部の講義は法学部より難しいと考えられていた。学問の体系ができていないうえに、文学は創作、鑑賞すべきもの、論にして教えることはできないという考え方が有力であったからである。ましてや大学は研究の成果を学生に伝授する場であるから当然でもあったが、今日では、多くの大学で当然のごとく文学部が設置されている。

観光学についても、学問の体系ができていないとの批判が強くある。観光の定義一つできないのであるから、体系などできようがないことも背景にある。筆者はその打開を図るため人流概念を打ち出し、人流観光概念として体系化ができないか試みを始めたばかりである。研究の成果などというにはおこがましい限りであるが、本書はその手始めである。

イギリスから帰った漱石は、ラフカディオ・ハーンの後を引き継ぎ、文学論という通年講義を行った。外山滋比古によれば、社会学と心理学を活用したという。世界でも前例のない講義であったそうだ。学生たちもちんぷんかんぷんの講義に反発し、一部で排斥運動さえあったという。観光がもてはやされるようになると、周辺領域からの研究も盛んになり、学際的であるということになる。周辺領域で展開されている研究手法は大いに参考になり、本書においても十分に活用させていただいた。学生たちの排斥運動が発生しないことを祈るばかりである。

開志専門職大学国際観光学長　寺前秀一（観光学博士）

おわりに

開志専門職大学国際観光学部の設立事務作業と併せて、人流・観光学の概論を記述していたが、その最中にCovid-19の世界的大流行が発生した。当然大学教育の方針にも影響し、テキストの作成にも大きな影響を与えることとなった。西欧も日本も中世社会はよそ者である旅芸人が地域にやってきて、農民はそれを楽しんだ。在地・在宅娯楽である。日常生活圏を離脱し始めたのは近世であるが、2020年になりIT技術を活用した在地・在宅娯楽が推奨されだした。単純な目標訪問客数四千万人ではなく、社会全体としての政策的意義の説明責任が求められるように変化したのである。

どの研究分野でも、多方面の知見をもとに行われ、しかもその分野が専門分野の詳細化ととともに拡大してゆく。もちろん観光も無縁ではなく、現在最先端の脳科学や情報学、環境学、歴史学等の知識が求められる。学生にもその知識の習得を要求することとなるが、教師が自己流でもいいから理解しておかないととても教壇では講義ができない。完全ではないもの、自分なりに得心のゆくように巷の解説を読み漁り、ネットサーフをして作り上げたものが本書である。

教科書であるから、できるだけ観光の現状を取り上げるとともに、なおかつ普遍的なものとして説明できなければならない。しかし数字は数年もすれば変化するから、取り扱いが難しい。このことを認識の上、あえて必要なものは取り上げている。読みやすいように、参考文献は可能な限り本文中に紹介しておいた。

年齢を考えると、おそらく本書は筆者が単独でまとめて出版するものとしては最後のものになるであろう。これまでご教授いただいた多くの方に感謝する次第である。

著者略歴

1972年東京大学法学部卒業　国土交通省、JR東日本、JTB、日本観光協会理事長、高崎経済大学教授、加賀市長等を歴任　観光学博士（立教大学）

著書　経済構造改革と物流、新世紀交通課題　モバイル交通革命　観光政策制度入門　観光政策学　観光政策風土記　ユビキタス時代の人流　観光学博士の市長実践記　観光人流概論